

□ 第13回国際オーボエ・コンクール・東京

倉 林 靖

公益財団法人ソニー音楽財団が主催している「国際オーボエコンクール」は、オーボエに特化した世界でも珍しいコンクールで、1985年の開始以来3年毎に開催されているが、2021年に開催予定だった第13回はコロナ禍で2023年に延期となり、今回5年ぶりの開催となった。28の国と地域から231名の応募があり、予備審査で第1次予選出場者を48名に絞り、動画による審査で15名を選出、そのうち辞退者2名を除く13名が、10月3日から武蔵野市民文化会館での第2次予選に臨んだ。そこからさらに最終的に本選出場者が6名に絞られて、10月8日の本選の日を迎えた。

ところでこの本選の日、冒頭にアナウンスで、オーボエの巨匠、モーリス・ブルグが、この前々日の10月6日に83歳で亡くなったことが急遽告げられた。ブルグは誰もが認めるオーボエ界の第一人者で数々の貢献をなし、当の国際オーボエコンクールでも、1997年の第4回から前回の2018年第12回まで審査員を務めていた人物である。本選翌日の入賞者・審査委員コンサートでは、冒頭で今回の審査委員長ハンスイェルク・シェレンベルガーの主導で黙祷が捧げられ、当日のコンサートがブルグに捧げられる旨の宣言をした。このような形で、審査委員を始めとする当コンクールの関係者たちの強い絆を深く感じさせる一幕でもあった。なお今回第13回の審査委員は、委員長の前述シェレンベルガーをはじめ、古部賢一、ゴードン・ハント、ラモン・オルテガ・ケロ、ドワイト・ペリー、辻功、吉田將の面々。

さて10月8日の本選の記述に戻ると、本選の2曲の課題曲の1曲めは、モーツァルトの「オーボエ四重奏曲」で、毛利文香(Vn)、田原綾子(Vla)、水野優也(Vc)の共演で演奏する。またもう1曲はR.シュトラウスの「オーボエ協奏曲」で、山下一史指揮の東京フィルハーモニー交響楽団をバックに演奏する。

入賞結果の順で紹介すると、第1位(大賀賞)と聴衆賞を獲得したアンヘル・ルイス・サンチェス＝モレノ(スペイン)は、モーツァルトでは豊かに鳴る、よく歌う演奏。R.シュトラウスでもまるでオペラ歌手のように麗らかに歌い、妖艶さやコケトリ的な性格まで曲の表情を豊かに出し切り、明確な個性を表して観客を魅了した。第2位のソン・ヒョンジョン(韓国)は、四重奏曲でも協奏曲でも軽やかな音色で飄々^{ひょうひょう}と、危なげない演奏を披露。第3位のレオニードゥ・スルコフ(ロシア)はモーツァルトでは線が細いが柔らかい、音楽の方向性の適格な演奏を展開、シュトラウスでも同じような柔らかい表情で演奏した。なおこのスルコフは、翌日の入賞者コンサートで、第2次予選課題曲のひとつであったクーブラン「新コンセール集」より「コンセール第7番」を奏形亜樹子のチェンバロ独奏で繊細かつ堂々と披露、バロック音楽に見事な適性を見せて聴衆を瞠目させた。

今回の本選は水準が高く、他の入賞者、アレクサンダー・クリメル(ドイツ)やハビエル・アヤラ(スペイン)も表情豊かな、入賞者と甲乙つけがたい演奏を展開し、日本の榎かぐやも検討して奨励賞を獲得した。

翌10月9日の入賞者・審査委員コンサートでは、上位入賞者3名が、上記スルコフはじめ、ソンがモーツァルトを、サンチェス＝モレノがシュトラウスを演奏した(シュトラウスを共演する東フィルは、この日はシェレンベルガーが指揮を執った)。また審査委員の面々も、聴衆垂涎の演奏を披露し、当コンクールを華やかに締めくくった。特に、最後のシュトラウスの直前の演奏で、ラモン・オルテガ・ケロとドワイト・ペリーのオーボエ、シェレンベルガーのコーラングレによるベートーヴェンの「オーボエ三重奏曲」は、素晴らしい表情の連続で聴衆を圧倒した。

そのほかの審査委員参加の曲目は、ゴードン・ハントのオーボエと、毛利、田原、水野によるチャローザの「オーボエ四重奏曲第5番」、ラモン・オルテガ・ケロのオーボエと吉田將のファゴット、奏形のチェンバロによるクーブランの「新コンセール集」より「コンセール第14番」、そして古部賢一のオーボエ、辻功のコーラングレ、吉田將のファゴットによるJ.S.バッハ「トリオンナタ第3番BWV527」。